



講演会

講師 **早瀬 昇** さん
 社会福祉法人
 大阪ボランティア協会常務理事

「絆」の意味

東日本震災から、この12月で一年半以上がたちました。昨年は「絆」という文字が最も多く使われました。絆はもとも「つなぐ」からきて「きつな」と書いたようですが、転じて「人々の間の強い結びつき」のことを「絆」と書くようになりました。

▼ 応援する人々との関係

突然の災害にあった人たちの立場はどう変化したが。

突然の被災→心の準備がない→奇妙なまでの優しさを体験→長引く仮設暮らしで、孤独になる→じわじわと広がる格差→緊張・禁欲態勢の限界、となりました。

そして、本当は家族や行政、企業等に応援してもらいたいが、なかなか依頼ができません。そこで、ボランティアに頼ることになります。しかし、報酬も払わないで、他人からの援助を受けるといことは、意外と難しい。ここで、「応援してくれる人たちの関係をどう築くか」という問題が出てきます。

▼ 依存できる鍵は「自信」

次に、応援する立場の人、いわゆるボランティアとしてどう対応するかという、被災者とできるだけ対等の関係が持てるようにする。被災者がどのような夢や願いを持っているのかを知るとともに、依存力から自発性が持てるようにサポートすることが大切です。あの『五体満足』を書いた乙武洋匡さんは、手足のない姿で生まれたとき、彼のお母さんから「まあ、かわいい」と言われたそうです。そして、このひと言が彼に生きる勇氣と自信を持たせてくれたそうです。

自発性は自信から生まれます。



▼ 燃え尽きやすい理由

頑張りすぎて燃え尽きないために

ボランティアをする人は、ともすると、頑張り過ぎて燃え尽きてしまうことがあります。なぜなら、頑張る人ほど疲れてしまうからです。

行政は議会の了解や条例等との関係で合意が必要です。企業は経営者の判断で事が進みますが、損得がからんできます。その点、市民活動は誰の了解がなくても、一銭の得にならなくても

▼ 燃え尽きないために「仲間」を広げる

この燃え尽き症候群をなくすためには、孤軍奮闘を脱し、仲間を広げることが肝要です。

グループの仲間は人によって「努力」の程度が違います。「努力」の程度が高い人ほど、多くの人を巻き込めますが、だれもが自分と同じだと考えないことです。要は、「努力」の程度が違ってもそれを許せるかどうかです。人によつての違いを認めることができれば、仲間は広がります。

例えば、同窓会には来たい人が来ます。まさに自発的集団です。中でも、幹事さんは大変なのですが、なぜできるのかと言えは、頑張るのが好きだからです。

ボランティアグループもやりたい人の集まりです。そして、皆好きなのです。好きなものを持っている人の方が、元気で好きでやっていくから、絆が生まれるのだと思います。

(Ma・H)

愛されることは大切

愛せることは、もっと大切

コーディネーターの鈴木光尚さん(足利市男女共同参画審議会会長)の進行のもと、全国各地からお越しいただいた

パネルディスカッション



た方々のお話をお聞きました。(右から) 早瀬昇さん・齋藤緑さん・中村順子さん・藤橋誠さん

山中あきさん・鈴木光尚さん
 パネリスト(北海道から)
 山中あきさん
 日本青年団協議会会長

協議会結成

60年目にして、初の女性会長となる。主に、文化活動・生活サポート・町内会作りのサポートなど多方面で活躍。



東日本震災

「全国から荷物が集まったのに、輸送手段がありませんでした。北海道からも送る準備をしたのですが、受け入れ側の事情ですぐには動かせませんでした。インフラの崩壊、特に地域の行政もメンバを亡くし、人手不足で細かい配慮ができませんでした。車はあってもガソリンがない、道が通れないなど、震災直後は大混乱を起していました。全国からの受入れ物資は増えても被災者に届けられなかったのです」と話された山中さん。

テレビなどでよく聞かれた話ですが、現場に直面した人から改めて話を聞くと、「それだけ深刻であったのだ」と思い知らされました。「重大な真実であるので、たくさんの方に知ってほしい、忘れないでほしい」という気持ちで伝わってきました。

声に出して伝えてほしい

「助けてくれ」「たのむ」と言われると、私たちは力を発揮します。問題の解決に向けて役割を与えてほしい。

リーダーの存在

「積極的に働きかける人」が少なかつたのですが、そんな時こそリーダーが必要で、混乱している場所にリーダーが入れば、問題の解決に向けて前進が始まります。止まっているところの原因は、やはり「リーダー不足」ということでしょうか。迷ったら、仲間に相談しましょう。止まっていけないで進めば道は開かれます。(Ma・K)

パネリスト(足利市から)

藤橋 誠さん

まち映画制作事務所代表・映像ディレクター



足利市にお住まいの藤橋さんは、映像制作、特に「まち映画」制作を仕事にされています。

「まち映画」をつくりたい

2002年に初めて足利に来て、商業映画は営

利を目的としているので、撮影に使われたまちのことは、映画の最後に字幕で出るだけ。一時的には、スタッフの滞在によって、そのまちは潤いますがその後の観光誘致にはつながりませんでした。

映画づくりは絆づくり

当り前のように行う行事も外部から見ると宝の山。住んでいては見えない自分のまちの良さに気付いてほしい。映画づくりの中で、新たな発見、コミュニティ、そして絆が生まれると思います。自分は、絆をつくるために、映画制作を行っています。

情報を読み解く力

子どもたちには、情報を収集し、発信する能力を養ってもらいたい。自身で何が正しいか、小中学生のうちから読み取る能力を身につけるために、自身で行動し真実を知ることが必要です。そうすることで、彼らがその映像を見たとき、見方が違ってくると思います。

映像制作は、いろいろなものが学べるという点で、意義ある仕事だと思っています。将来、劇場で上映できるように足利市の「まち映画」を作りたいですね。(Mi・O)